

ふなはし 船橋遺跡現地公開資料

2003年10月11日
(財)大阪府文化財センター

船橋遺跡とは

船橋遺跡は、藤井寺市と柏原市にまたがり、河内橋をほぼ中心として大和川両岸に広がる、南北約1.2km、東西約1.5kmの広大な遺跡です。1704年（江戸時代の宝永元年）に大和川が堺の方向に付け替えられ、遺跡を東西につらぬくようになりました。

この遺跡は、1954年（昭和29年）に河内橋の上流側に堰が作られた時、その下流側の河床がえぐられ、大量の土器などが人目にふれたため、知られるようになりました。

その時、川の中に建物の柱の礎石のような石も見られ、古代の瓦も出土している事から、昔、そこにお寺があったと考える人もいます。日本の古代において、礎石をすえて柱を立て、屋根に瓦をふくような建物は、お寺以外、考えにくいからです。

また、南河内は、特に、古代のお寺が多い事で知られています。今も周辺にある葛井寺・土師寺・野中寺などは、古代から続いているお寺です。

なお、船橋遺跡の中に河内国府という、河内国を治める役所があったと考える人もいます。

これまでの調査で、掘立柱建物という、穴を掘って柱の下の部分を埋めて建てる建物の跡が、いくつか見つかっています。それらの多くが、当時の一般の村の家より、柱穴も柱の太さも大きく、立派な建物と思われる事と、出てくる土器の多くが、当時飛鳥や奈良の都で使われていた土器と同じようなものである事から、そう考えるわけです。

河内国府の候補としては、船橋遺跡の南側、坂を登った台地の上の志紀県主神社の周辺に広がる国府遺跡や、応神陵古墳（考古学では菅田山古墳とも言います）の西一帯に広がるはざみ山遺跡などもあり、いまだ決着がついていません。

古代だけではなく、船橋遺跡では、旧石器時代から江戸時代まで、さまざまな時代の人々の生活の跡が見られます。その中でも、古墳時代の土器は、大量に見つかっており、考古学を学ぶ人たちに、広く知られている資料となっています。

今回の調査は、国土交通省が大和川の堤防の幅を広くする高規格堤防の計画に伴い、事前に発掘調査をするもので、(財)大阪府文化財センターが2000年度より行っている、一連の調査の一つです。

まだ、現場での発掘調査の途中でもあり、これから後も時間をかけて整理や分析をし、最後に、報告書を刊行する予定です。今日は、未整理ながら、生の発掘現場での資料を楽しんでいただければ幸いです。

今回の調査から考えられること

去年の調査もふまえて、その成果からどんな事が考えられるでしょうか。

今回の調査地では、古墳時代の土器などがわずかに出土しました。また、飛鳥時代中頃の建物や土器がたくさん見つかりました。それが、一番注目される発見です。

須恵器と土師器

飛鳥時代中頃といえば、今から 1350 年ほど前、大化の改新の頃です。仏教が伝来し、日本の文化や国のありかたが大きく変わっていく時代でした。

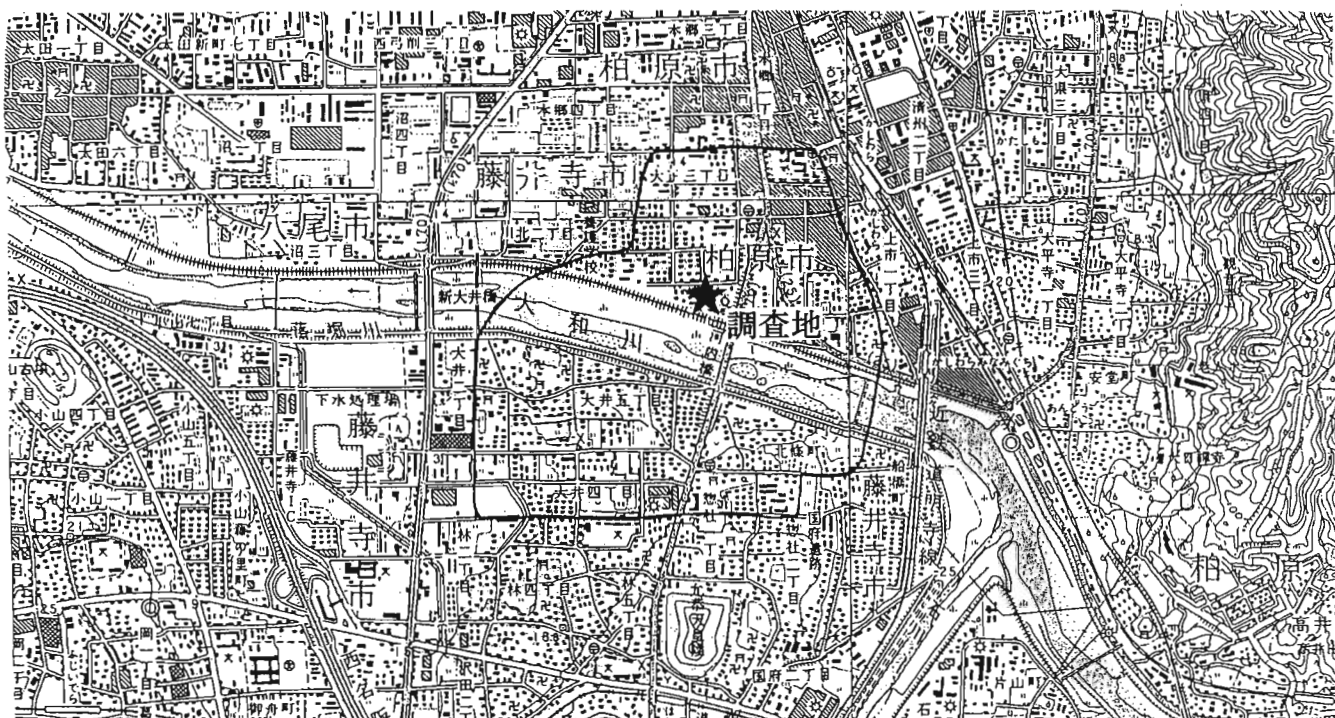
ここで出土した土器も、その時代の代表的なものです。須恵器という、硬くて青みがかった灰色をしたものと、土師器という、やわらかい感じで赤みがかったものがあります。

坏という、当時のお茶碗を見ると、須恵器のものは、古墳時代の伝統をたもったものと、この時代に新しく作られるようになった、底が平らで、蓋につまみのつくものの両方が見られます。

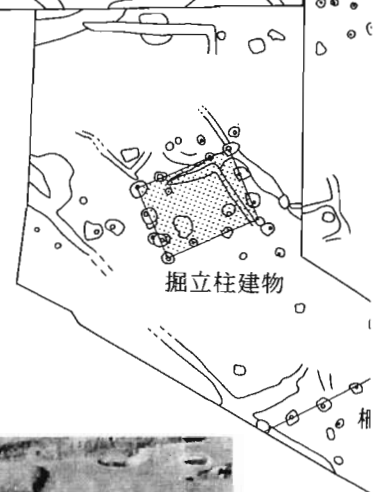
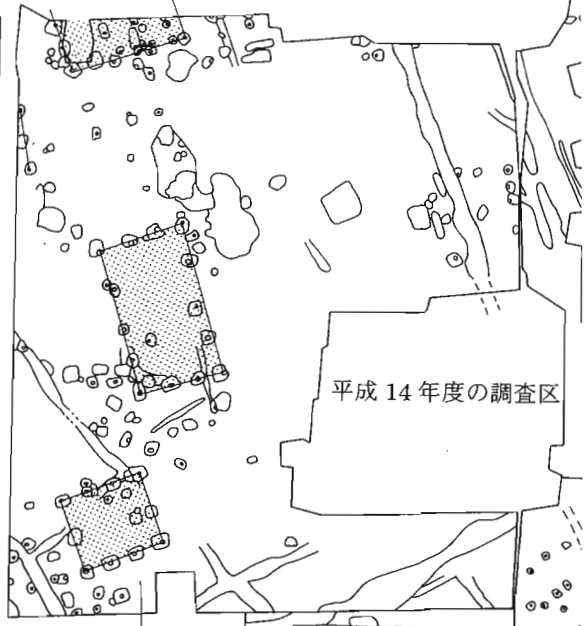
土師器の坏は、大中小の三つの大きさに分類でき、サイズを合わせて作られた規格品であることが分かります。このように食器のサイズを何種類かに決めて作る傾向は、奈良時代にも続き、それが、政治的な儀式のために定められていた事でもあるようです。

それらの土器を使っていた人たちの建物跡も、たくさん見つかりました。この部分だけでも、十数棟の掘立柱建物が見つっています。柱穴が大きく、その並びもきれいで、立派な建物であったと思われるものが多いのが特徴です。

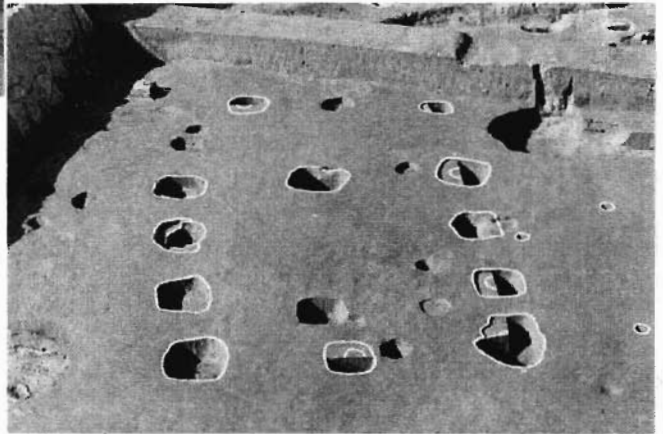
では、人々は、その建物が建ち並んだ場所で何をしていたのでしょうか。それを考える材料になるものも見つかりました。



船橋遺跡位置図



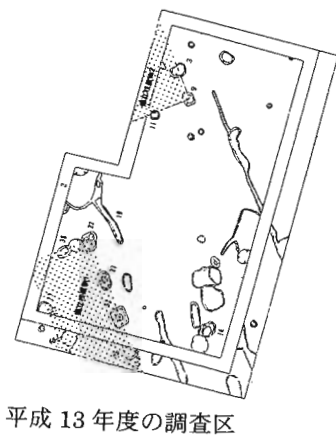
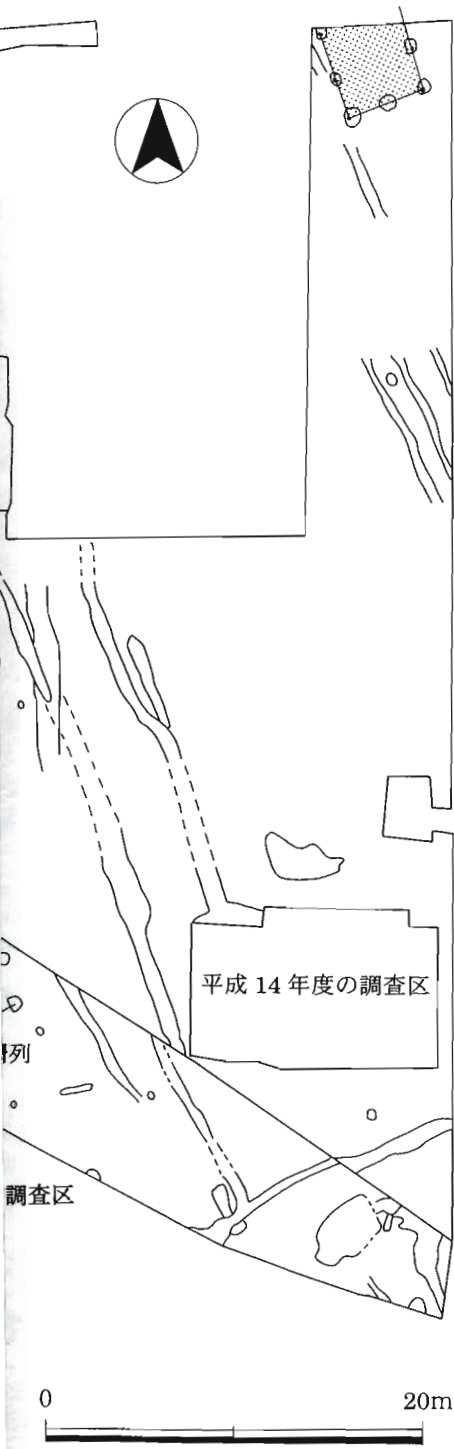
掘立柱建物(西から)



掘立柱建物(北東から)

今回の

飛鳥時代の



船橋遺跡

ガラス小玉の^{いがた}鑄型

ガラス小玉とは、今で言うビーズ玉のような、小さくて、糸をとおす穴のあいたガラス玉のことです。

ガラス製品は当時貴重品で、庶民には手の届きにくい高価なものであったようです。

その鑄型の破片が、建物の周囲からたくさん出土しました。明らかに高い熱を受け、ガラス小玉の製作に使用されたと思われる鑄型片が多く、ここでガラス小玉を作っていた可能性が高いと考えられます。

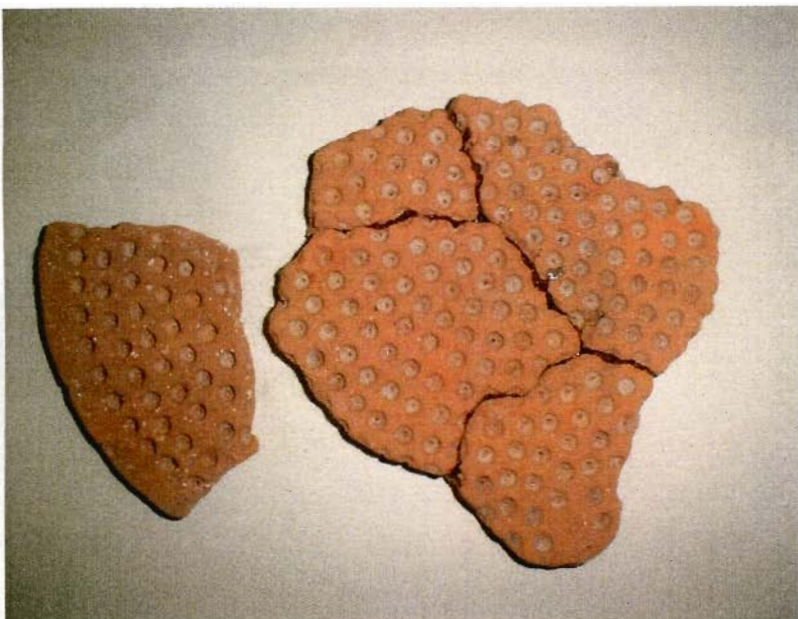
ふいごの^{はぐち}羽口

ふいごの羽口とは、^{せいてつ}製鉄や^{かじ}鍛冶などの^ろろや^{ほど}火処に風を送る部品です。ここでは、ガラスを溶かす炉に使われていたのかもしれませんが。

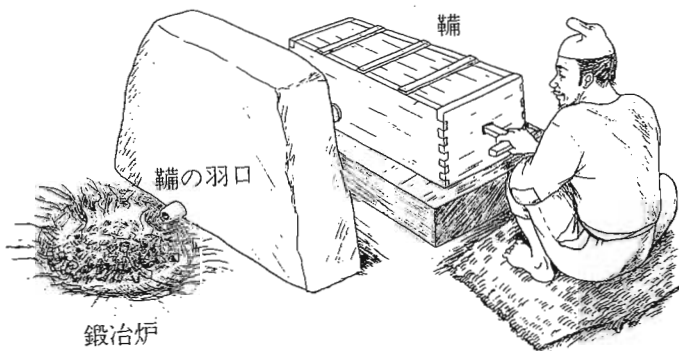
また、炭がたくさん入った穴も見つかっています。昔の炉は一回使うごとに壊すものが多く、発掘調査では見つかりにくいのですが、湿気を防ぐため、炉の下に炭などをつめる事があったのが分かっています。この遺構も、その可能性があると考えられます。

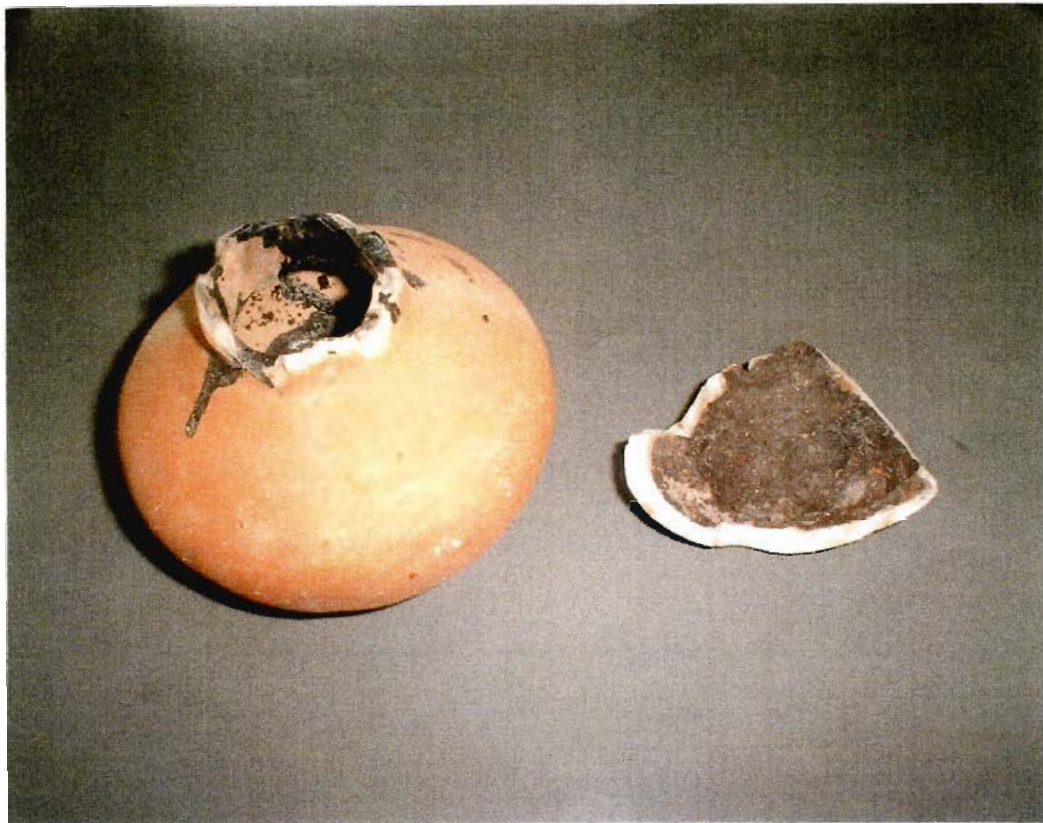
以上の事から、これらの建物は、ガラス製品を作る^{こうぼう}工房であった可能性が高いと思われます。では、作っていたのはガラス製品だけだったのでしょうか。

◀ ガラス小玉の鑄型



▼ ふいご(鞴)の羽口





▲ 漆を入れた壺

うるしつぼ 漆壺

内側にべったり漆がついた壺も見つかっています。これは漆壺と言って、産地から漆を詰めて運んできたものです。壺の首が割れた所にも漆が付いているのは、首を割って、中に残った漆を、最後までかき出そうとしたためと思われます。

漆は塗料だけではなく、接着剤として使われたり、鉄の鎧よろいに錆止めとして焼き付けられる事もありました。いずれも技術のいる仕事で、漆壺が一般的な集落から出土する事は、ほとんどありません。今回の調査地で、漆を使って何をしていたかは分かりませんが、漆を扱う技術を持った人がいた可能性は、大きいと思われます。

てつさい 鉄滓

鉄滓とは、製鉄かじ・鍛冶などの時に出る鉄以外の不純物がかたまったものです。ここではわんがたさい碗形滓という、鍛冶の時に出る特有の鉄滓が出土しているので、鍛冶職人もいたのではないかと考えられます。

つまり、ここでは飛鳥時代に、ガラス職人や漆職人、鍛冶職人などが働いていた可能性が考えられるようになってきました。様々なもの作りの人が、一ヶ所に集まっていたという事は、工房のエリアがあったと考えられます。

いずれにしても、今回の調査では、船橋遺跡の中に、飛鳥時代前半の様々な職種を集めた工房域が存在した可能性が強い事を指摘でき、遺跡の性格の解明に向けての、重要な一步となったと思われる。